

物語とファンタジー (1)

——『モモ』から『はてしない物語』へ——

Geschichte und Phantasie (1)

—— Von Momo zur unendlichen Geschichte ——

永井邦彦

kunihiko NAGAI

2007年10月9日受理

Die wahre, eigentliche Triebfeder, die mich beim Schreiben bewegt, ist die Lust am freien und absichtlichen Spiel der Phantasie.¹⁾

書くときにわたしをつき動かしている真の本源的原動力は、ファンタジーの自由な意図のない遊びを楽しむことなのです。

序

ミヒャエル・エンデ(1929-1995)は、一般に児童文学の作家として有名である。彼の児童文学としての代表作をあげると、『ジム・ボタン』、『モモ』そして『はてしない物語』ということになる。『ジム・ボタン』は『ジム・ボタンの機関車大旅行』(1960)と『ジム・ボタンと13人の海賊』(1962)からなる。前者が1961年にドイツ児童文学賞を受賞し、エンデは本格的に執筆活動を開始することになった。1973年には『モモ』が発表され、翌年に再びドイツ児童文学賞が授与された。そして『はてしない物語』は1979年に刊行され、エンデの最大のヒット作となった。エンデはこれらの作品に言及しながら、本を書くということについて、次のように述べている。

わたしはよく言うのですが、わたしが書くという行為は冒険のようなものだって。その冒険がわたしをどこへ連れてゆき、終わりがどうなるのか、わたし自身さえ知らない冒険なのです。だから、どの本を書いた後もわたし自身がちがう人間になりました。

[略] わたしの本はそれぞれまったく異なる。どの本を書いた後も、そのたびにわたし自身が(変わった)からで……たとえば『ジム・ボタン』の続編を書くことはできない。わたし自身が変わったからで、同じ本をもう一度書くことはできません。できないのです。『ジム・ボタン』の後に『モモ』だったら書ける。そして『モモ』の後にわたしはまた変わり、『はてしない物語』を書くことができた。²⁾

エンデがこれら3作品において、何をテーマとし、どのような冒険をし、どのように変わったのか、それ

をそれぞれの作品の成立順に考察することは、きわめて魅力的な課題である。特に『ジム・ボタン』は3作品中では奇想天外な冒険に満ち満ちていて、主人公といっしょに読者もそれらの冒険を満喫できる、もっとも楽しい作品に仕上がっている。それに対して、時間泥棒が人間から盗んだ時間を、人間たちにとりかえした少女の物語である『モモ』には、現代文明の根底を構成している時間について、児童文学というジャンルからは予想もされない記述がなされている。この作品には読者をして、「時間とは何か」、を真剣に考えるにいたらせるちからがあり、読者は時間をとおして、現代文明のもつ危うさを認識することになる。この作品を児童文学というジャンルの枠内にとどめておくことはたして妥当か、おおいに問題とされるべきである。

本を読むことが何よりも大好きで、あれこれ想像することが唯一の得意なことである、少年バスチアンが夢中になって読みふけている『はてしない物語』の舞台は、いまや滅亡の危機に瀕しているファンタージェンという国である。彼は読み進んでいくうちに、彼自身がこの物語の重要な登場人物になっていることを知って驚く。そして彼は女王幼なごころの君を救うために、あろうことか、自分が読んでいる本の中の世界へとびこんでいく。それは人間たちから失われつつある「真の」ファンタジーの復権の物語である。と同時にこの作品は、「ものがたりをものがたる」ことをテーマとしている。以下のような表現がある。

„Weißt du nicht, dass Phantasien das Reich der Geschichten ist? Eine Geschichte kann neu sein und doch von uralten Zeiten erzählen. Die Vergangenheit entsteht mit ihr.“(225)

「ファンタージェンは物語の国だということを、ご存じないのですか？ 物語は新しくても大昔のことを語ることができるのです。過去は、物語と共に成立するのです。」(313)

ここに引用した文が意味することについては、次の論文でじっくり論考することになるが、以下の考察においても重要な役割を果たすことになる。

ところでこの論文のタイトルは「物語とファンタジー」であるから、筆者のこれまでの文章を読めば、対象となるのは、時間がテーマとなっている『モモ』ではなく、当然『はてしない物語』のはずである。にもかかわらず、なぜ『モモ』から『はてしない物語』へとサブタイトルがついているのか。それは時間の物語と思われた『モモ』のなかに、「物語とファンタジー」の前史をなすものが認められるからである。したがって、今回の論文では『モモ』を対象にして、「物語とファンタジー」の予備的考察を行なう。それがタイトルの(1)の意味するところであり、『はてしない物語』自体の考察は「物語とファンタジー(2)」で行なう予定である。

なお、『モモ』と『はてしない物語』からの引用に際しては、まずドイツ語の原文を置き、つぎに翻訳本(大島かおり訳:『モモ』、上田真而子・佐藤真理子訳:『はてしない物語』)による訳文をかかげ、必要に応じて、筆者の注釈をつけた文を追記することにする。その理由は、ひとつにはこれらの二作品は翻訳によってこどもからおとなまで広くゆきわたっており、原文を解しないひとにも引用された文がどのような文脈で書かれたものであるか、を容易に検索することができるようにするためである。もうひとつの理由は、ふたつの翻訳はともにきわめて優れたものであるけれど、翻訳としてひとつの日本語に — しかもこども向けに — 固定しなければならぬ制約がある。たとえば、ドイツ語の《Geschichte》と《Phantasie》をどのように訳すか、は大きな問題である。したがってこの論文の論旨を展開するうえで、原語にもどって、注釈を加えながら考察することがどうしても必要だからである。

I

すでに説明したように、今回の論文では『モモ』をとりあげるけれども、その主たる対象となるのはヒロインであるモモでなく、パイプレーヤーにあたるジジである。ジジと対をなすもうひとりのパイプレーヤーにベッポがいる。二人は『モモ』の第4章のタイトル「寡黙な老人と口達者な若者」《Ein schweigsamer Alter und ein zungenfertiger Junger》になっている。寡黙な老人が道路掃除人ベッポであり、口達者な若者が観光案内人ジジである。二人はタイトルからわかるように、好対照をなしている。

寡黙なベッポは、あることを質問されると、それに答えるのが必要と思われるときには、その後2時間も経ってから、場合によってはまる1日経ってから答える。当然、答えられた人は質問自体をすでに忘れていて、その結果としてベッポは変人あつかいされる。しかし彼の寡黙さには理由がある。

Sie(d.h. Momo) wusste, dass er(d.h. Beppo) sich so viel Zeit nahm, um niemals etwas Unwahres zu sagen. Denn nach seiner Meinung kam alles Unglück der Welt von den vielen Lügen, den absichtlichen, aber auch den unabsichtlichen, die nur aus Eile oder Ungenauigkeit entstehen. (36)

こんなに時間がかかるのは、けっしてまちがったことを言うまいとしているからだ、と、知っていたからです。ベッポの考えでは、世の中の不幸というのはすべて、みんながやたらと嘘をつくことから生まれている、それもわざとついた嘘ばかりではない、せっかちすぎたり、正しくものを見きわめずにうっかり口にするうそのせいなのだ、ということです。(51)

ここには今回の論文の核となる2つのことが書かれている。真実と嘘である。ベッポは「まちがったこと」《etwas Unwahres》を言わないために、時間をかけて、じっくり考え、言葉を選んで答える。なぜなら、世の中の不幸はすべて、人間たちがつく「嘘」《Lügen》から生まれているからである。しかも嘘は「わざと」《absichtlich》生みだされるばかりでなく、人間たちの軽率さや無思慮から生まれるというのだ。「意図せずして」《unabsichtlich》、結果として嘘になることもあるのである。「正しくものを見きわめずに」というのは《aus Ungenauigkeit》「不正確さから」を訳したものである。世の中を不幸から守るために、ベッポは寡黙であらざるをえないのである。

ベッポとはちがって、ジジにとっては真偽などどうでもよいことである。彼は観光客が町外れにある古代の円形劇場を訪れると、史実など無視して、おもいつくままに、「口からでまかせを言って」《das Blaue vom Himmel heruntererzählen》案内する。付近の住民たちは、ジジのそんな振る舞いをどのように評価していたか。

Die Leute aus der näheren Umgebung lachten über Gigis Einfälle, aber manchmal machten sie auch bedenkliche Gesichter und meinten, es ginge doch eigentlich nicht an, sich für Geschichten, die bloß erfunden seien, auch noch gutes Geld geben zu lassen. (39)

近所に住む人たちはジジのインチキを笑い話のたねにしていたが、それでもときどきはひたいにしわをよせて、あんなでたらめな作り話をして、そのうえそれで金をもうけるなんてこまったものだ、心配そうに話していました。(56-57)

「インチキ」とあるのは、《Einfälle》「おもいつき、着想」である。ジジがつぎつぎとおもいつくままに事実に基づかない説明を旅行者に対してくりひろげるからである。そして「あんなでたらめな作り話」とあるのは《Geschichten, die bloß erfunden seien》「でっちあげられたにすぎない話」である。しかし《Geschichten》は「物語」であり、過去分詞《erfunden》の不定詞《erfinden》は「虚構する」ことであり、「創作する」ことをも意味するから、ジジに好意的に逐語訳すれば「創作された(にすぎない)物語」である。したがってほかの人々からみれば、インチキであり、でっちあげられたにすぎない話も、ジジの立場からすれば、まったく異なったものになる。ジジは次のように言って、反論する。

„Das machen doch alle Dichter“, sagte Gigi dann. „Und haben die Leute vielleicht nichts bekommen für ihr Geld? Ich sage euch, sie haben genau das bekommen, was sie wollten! Und was macht es für einen Unterschied, ob das alles in einem gelehrten Buch steht oder nicht? Wer sagt euch denn, dass die Geschichten in den gelehrten Büchern nicht auch bloß erfunden sind, nur weiß es vielleicht keiner mehr?“ (39)

「詩人だってそうじゃないか。詩人に金をはらう人たちは、むだに金を捨てて言うのかい? 詩人からちゃんとのおもどりものをもらってるじゃないか! それにさ、学者の書いた本に出てくるか、こないかってことに、そんなにちがいがあかな? 学者の本に出てくる話だって、ただの作り話かもしれないじゃないか。ほんとうのことは、だれも知らないんだもの、そうだろう?」 (57)

ここには2つの問題がある。ひとつは、彼の行為は、《Dichter》(詩人だけでなく作家も意味する)が作品を創作し読者に提供することによって、収入を得るのと同じだ、というのである。作家や詩人の場合には、その作品を「でっちあげる」と言うわけにはいかないであろう。彼の作り話が旅行者たちを満足させるものであるならば、それによって金銭を得ても何ら問題はないというのである。

だが、もっと重要なのは、「話」(=「物語」)の虚構性の問題である。ジジがここで言う《ein gelehrtes Buch》とは「学術的な本」のことであり、この後に引用する部分を含めて考えると、廃墟となった円形劇場の歴史に関する本のことである。ジジに言わせれば、学術的な本に書かれていることと彼の話の違いはどこにあるのか。学者の言う《Geschichten》は《erfinden》されたものではないと、どうして言えるのか。こうし

て彼の抗弁の矛先は真偽の問題へと向かう。

„Ach, was heißt überhaupt wahr oder nicht wahr? Wer kann schon wissen, was hier vor tausend oder zweitausend Jahren passiert ist? Wisst ihr es vielleicht?“

„Nein“, gaben die andern zu.

„Na also“, rief Gigi Fremdenführer. „Wieso könnt ihr dann einfach behaupten, dass meine Geschichten nicht wahr sind? Es kann doch zufällig genau so passiert sein. Dann habe ich die pure Wahrheit gesagt!“ (39-40)

「ほんとうだとか、うそだとか、いったいどういうことだい? 千年も二千年もむかしにここでどういうことがあったか、知ってるやつがいるってのか? え、あんたたちはどうだい?」

「知らないさ。」あいてはみとめます。

「ほらみろ!」と観光ガイドのジジはさげびます。

「そんならどうして、おれの話がうそだなんて言える? ひょっとすると、ほんとうにそういうことがあったかもしれないじゃないか。そうだったら、おれの話は、正真正銘の事実だってことになるよ!」

(57)

すでに翻訳でみたように、ベッポが無口である理由を説明する文では「真実でないこと」《etwas Unwahres》が「まちがったこと」と訳されていた。上記の引用文でも「ほんとう(の)」は《wahr》という形容詞であり、「うそ(の)」は《nicht wahr》である。そして「正真正銘の事実」とは《die pure Wahrheit》を訳したものである。したがって、筆者は「ほんとう(の)」、「うそ(の)」、「正真正銘の事実」をすべて統一して「真実(の)」、「真実でない」、「まぎれもない真実」と訳すことにする。

そしてここに引用した文のジジの主張に従っていけば、彼の「おもいつき」とされる話(=物語)は実際にあったこと、つまり真実であるということになる。灰色の男が、時間に関してインチキの計算をしてフージィを丸めこんだように、ジジもいつのまにか、彼の《erfinden》した《Geschichten》は実際にあったこと、真実だと主張しているのである。

このときジジは《Geschichte》の核心となる部分を突いているにもかかわらず、素通りしてしまう。つまり《Geschichte》は「物語」を意味するだけでなく、「歴史」をも意味しているのである。周知のように《Geschichte》は《geschehen》「起こる、生じる」という動詞に由来するのであり、語源的には生起したこと、歴史、つまり「実際にあったこと」を意味しているのである。それが「物語」を意味するようになったのは、ある語源辞典⁹⁾によれば、16世紀からである。ま

た《Geschichte》については、ドゥーデンに次のように説明されている。

実際のもしくは虚構の出来事が、話し言葉あるいは書き言葉で、筋として展開され叙述されたもの。
mündliche od. schriftliche, in einen logischen Handlungsablauf gebrachte Schilderung eines tatsächlichen od. erdachten Geschehens, Ereignisses.⁴⁾

以上の説明によれば、「実際の」と訳した《tatsächlich》は、「事実、本当のこと」を意味する《Tatsache》の形容詞であり、「虚構の」と訳した《erdacht》は、「案出する」とも「でっちあげる」とも訳される《erdenken》の過去分詞である。つまり「物語」は事実でもあり、作り事でもある。ジジは彼の物語について、あるときは事実の力点を置き、またあるときは作り事に力点を置いて、都合のいいように解釈している。

ここに至って、われわれはすでに「序」において引用した『はてしない物語』の文章の重要性を理解するであろう。

ファンタジーは物語の国だということを、ご存じないのですか？物語は新しくても大昔のことを語ることができるのです。過去は、物語と共に成立するのです。

ただし、再度指摘することになるが、ジジはこの点については意識しておらず、素通りしてしまっている。彼の思考はまだそこまでは達していない。(そしてまたわれわれの考察も、今回の論文ではこの問題を究明するに至ることはない。)

『モモ』のこの段階においては、真実でないことを語らないために寡黙であろうとする老人ベッポと、自分のおもいつき(よく言えば「着想」)の豊かさを誇るあまり、真偽を度外視して語るジジが対照的に描かれているのである。

II

寡黙のひとベッポと饒舌のひとジジ、両者の距離は『モモ』の章が進むにつれて、思慮のひとベッポと空想の世界に遊ぶひとジジとなって、ますます拡大する。第8章では、モモが彼女を訪ねてきた灰色の男たちのひとりから聞きだしたかれらの秘密をめぐって、ベッポとジジの意見が対立する。

„Wenn es nämlich wahr ist, was Momo da gesagt hat, dann müssen wir uns gut überlegen, was wir tun.“ (102)

つまり、モモの話がほんとうだとすると、われらはどうしたらいいかをよく考えなくちゃなんのだ。(151-152)

ベッポにとって重要なことは、行動することではなく、「よく考える」《überlegen》ことである。人間たちに気づかれずに時間を盗むことが、灰色の男たちの狙いだとすれば、このようなことをほんとうに実行できる秘密の犯罪集団に対して、ベッポたちは軽々しく行動することは許されない。灰色の男たちを挑発する軽率な行動は、かえってモモや子どもたちを危険に巻きこむことになるからである。ベッポは繰り返し、よく考えなければならないと、行動する前に熟慮することを主張する。そしてベッポの心配を一笑にふすジジに対して次のように批判する。

„Mir scheint, du glaubst gar nicht, dass es wahr ist, was Momo erzählt hat.“ (102)

おまえはモモの話がほんとうだとは思っていないよだな。(152)

ベッポはモモの話すことが真実だと思うから自制を促しているのに、それを聞きいれないジジは、モモの話をも真実だとは思っていないから軽はずみな行動をしようとしている、というのである。ここで再びジジの真実とは何か、という反論が始まる。

„Was heißt denn wahr! Du bist ein Mensch ohne Phantasie, Beppo. Die ganze Welt ist eine große Geschichte und wir spielen darin mit. Doch, Beppo, doch, ich glaube alles, was Momo erzählt hat, genauso wie du!“ (102)

「ほんとうって、いったいなんだよ。あんたは想像力のない人間だな、ベッポ。世の中ってのはな、それぜんたいがひとつのどっかいお話なのさ。そしておれたちやみんな、そのお話の登場人物なんだ。だがな、おれはモモの話をほんとうだと信じてるよ、あんたとおなじにね！」(152)

第4章でも真実が問題になったが、そこではジジが旅行者たちにおもいつくままに物語ることが、でたらめではなく、歴史学者の語るのと同様の真実にひとしいと主張されていた。ここでは学者が引き合いに出されるのではなく、「ファンタジー」《Phantasie》という言葉が登場する。ジジが旅行者たちに語った円形劇場についての着想豊かな — ありていに言えば、架空の — 歴史物語は、彼のファンタジーの産物ということになるであろう。ファンタジーをどのような日本語に移し変えるべきか、問題となるところであるが、第4章の文脈では「空想」あるいは「空想力」であろう。

それにたいして、この第8章では、どのように訳すべきであろう。ジジはベッポと同じようにモモの話を真実だと信じている、と言っている。モモの話が真実であるならば、存在もしない灰色の男たちのことを出発点にするのではなく、灰色の男たちが存在することを行動の出発点にするのだから、「空想」よりも「想像力」という日本語のほうが適切であろう。

そして《Phantasie》の次に注目すべき表現が続く。「世の中ってのはな、それぜんたいがひとつのでっかいお話なのさ。そしておれたちやみんな、そのお話の登場人物なんだ。」じつにうまい名訳である。しかし原文にそって注釈すると、以下ようになる。「ひとつのでっかいお話」《eine große Geschichte》とは、繰り返すまでもなく「おおきな物語」である。「おれたちやみんな、そのお話の登場人物なんだ」《wir spielen darin mit》とは、「おれたちはそれ(物語)に参加している」ということであるが、《mitspielen》という動詞に焦点をあてれば、「おれたちはその物語なかでいっしょに演技している」登場人物だということになる。そして「演技する」《spielen》とは、すなわち「遊ぶ」ことである。

ジジはベッポのように灰色の男たちの危険性を認識しない。ジジはかれらをどのようにしてやつつけるか、想像をたくましくする。彼の想像力は地上の現実を離れて、空高く飛翔する。彼は大きな物語の中で遊ぶ。彼の想像することは空想と紙一重となる。ジジは自分たちと灰色の男たちの闘いの結末を思い描く。ジジはその結末をどのようにして思い描くか。

In dieser Nacht träumte Gigi vom künftigen Ruhm als Befreier der Stadt. Er sah sich im Frack, Beppo im Bratenrock und Momo in einem Kleid aus weißer Seide. Und dann wurden ihnen allen Dreien goldene Ketten um den Hals gelegt und Lorbeerkränze aufgesetzt. Großartige Musik ertönte und die Stadt veranstaltete zu Ehren ihrer Retter einen Fackelzug, wie er noch nie zuvor Menschen dargebracht worden war, so lang und so prächtig. (103)

その夜ジジは、じぶんが町の救い主としてすばらしい名声をはくす夢を見ました。じぶんは燕尾服、ベッポはフロックコート、モモは白い絹のドレスを着ています。そして三人そろって、首に金のくさりを、頭には月桂冠をさずけてもらうのです。どうどうたる音楽がなりひびき、町じゅうの人が三人の救い主の功績をたたえるために、これまでの歴史に見なかったほどのなやかな長いまつ行列をもよおすのです。(153)

ジジが灰色の男たちに対する勝利をどのようにみごとに思い描こうとも、それは彼の見た夢なのである。彼のファンタジーは夢にその場所を移し、夢物語となる。

それに対してベッポは何をしていたか。

Zur gleichen Zeit lag der alte Beppo auf seinem Bett und konnte keinen Schlaf finden. Je länger er nachdachte, desto deutlicher wurde ihm die Gefährlichkeit der ganzen Sache. (103)

これとおなじころ、ベッポじいさんはベッドによくなったものの、まんじりともできずにいました。考えれば考えるほど、ことの危険がはっきり見えてきます。(153)

ベッポはやはり考えている。彼が「考えぬく」《nachdenken》ことは止むことがない。

人間たちから時間を盗む灰色の男たちが存在することを聞いて、正反対の反応を示すふたり。ファンタジーの実現を夢見る楽観的なジジと悲観的な結末を予感するベッポ。ここでも二人は好対照をなしている。

III

モモの周りに集まった子どもたちは、時間を節約するために子どもたちとの時間を急速に失っていくおとなたちに対して、ベッポの心配をよそに、ジジの提案に従って、時間を盗む灰色の男たちの存在を知らせるために、街中をデモンストレーションして回る。しかしかれらが計画した集会にはおとなたちは一人も姿をあらわさない。集会が失敗に終わり、悄然とするモモに対して、ジジが慰めの言葉をかける。

„Nimm's doch nicht so schwer, Momo. Morgen sieht alles schon wieder ganz anders aus. Wir denken uns einfach was Neues aus, eine neue Geschichte, ja?“ (113)

「そう深刻に考えることはないよ、モモ。あしたになれば、またちがつて見えるさ。なにか新しいことを考えだせばいいんだ、なにか新しいお話をな、そうだろう？」(167)

ここではジジが「お話(=物語)」《Geschichte》を作り事と理解していることが注目される。前節「II」で、ジジはベッポに「世の中全体がひとつの大きな物語で、おれたちはそれに参加している／そのなかでいっしょに演技している」と言ったが、おとなたちはジジの考える物語には参加せず、したがっていっしょに演技することもないのであったのである。つまりジジにとってはひ

とつの物語が終わったのであり、だから新しい物語を考えだせばよいということになる。

しかし、モモは答える。

„Das war keine Geschichte.“ (113)

「あれはお話なんかじゃなかったのよ。」 (167)

つまりここでは、モモにとっても《Geschichte》は「作り話」を意味しているのである。モモが灰色の男たちについて語ったことは《Geschichte》ではなく「真実」《Wahrheit》だった。だからジジはモモを傷つけることになる。

気まずくなったジジは、モモをひとり残して立ち去る。そしてその夜のうちに、ベッポからモモが灰色の男たちによって拉致されたことを知らされる。

Während Beppos Worten war langsam alle Farbe aus Gigis Gesicht gewichen. Ihm war, als sei ihm plötzlich der Boden unter den Füßen weggezogen. Bis zu diesem Augenblick war alles für ihn ein großes Spiel gewesen. Er hatte es so ernst genommen, wie er jedes Spiel und jede Geschichte nahm — ohne dabei je an Folgen zu denken. (125)

ベッポのことばを聞いているうちに、ジジの顔からしだいに血の気がうせていきました。きゅうに足もとの地面にポッカリ穴があいたような気持ちです。たったいままで、ジジにとってこれまでのことはみんな、すてきな芝居でした。ジジはそれなりに真剣にとりくんできました。どんな芝居、どんなお話にも、ジジは本気でとりくむのです — ただ、その結果を考えるということはしなかったのです。 (185-186)

ジジはこれまで彼がおこなってきたことはすべて「すてきな芝居」《ein großes Spiel》であったことを認める。すでに考察したように、「お話」、つまり《Geschichte》は、登場人物によって「演技」されるものである。したがって、「どんなお芝居、どんなお話にも」《jedes Spiel und jede Geschichte》とあるが、これまでの文脈から判断すれば、「芝居」《Spiel》＝「物語」《Geschichte》と言えよう。

またこれもすでに指摘したように、《spielen》、つまり「演技する」とは「遊ぶ」こと（したがって「芝居」＝「遊び」）である。ただし「ジジはそれなりに真剣にとりくんできました。[...]ジジは本気でとりくむのです」とある。重要なのは「真剣に」、「本気で」という説明であり、もともとなった形容詞は《ernst》である。彼は、どんなときにもファンタジーのおもむくままに、真剣に、本気で遊んだのである。ただし彼は熱中するあま

りに、「結果を考えることをしなかった」のである。

モモの失踪に直面して、ジジは人生ではじめての経験をする。

Zum ersten Mal in seinem Leben ging eine Geschichte ohne ihn weiter, machte sich selbstständig und alle Phantasie der Welt konnte sie nicht rückgängig machen! Er fühlte sich wie gelähmt. (125)

それがいま、生まれてはじめて、お話のほうかジジをおきざりにしてかってにどんどん進行してしまい、どんなに想像力を働かせてみても、話をもとにもどすことができなくなってしまったのです！ジジはからだじゅうの力がぬけていくのを感じました。 (186)

《Geschichte》のほうか、彼の《Phantasie》を超えてしまったのだ。訳文には「かってに」とあるが、これは「独立して」《selbständig》を訳したものである。ジジは物語を自由にコントロールできるとおもいこんでいたが、いまや物語は彼から独立して、彼のファンタジーのおよばない事態が生じたのである。

これ以後のジジについては、手短かにまとめることにしよう。モモの失踪後に彼は人気作家となる。しかしそれが灰色の男たちの策謀によって、実現されたことを知ったジジは、そのときから抜け殻も同然となる。

Von diesem Tag an hatte Gigi alle Selbstachtung verloren. [...] Früher hatte ihn seine Phantasie ihre schwebenden Wege geführt und er war ihr unbekümmert gefolgt. Aber nun log er! (176)

この日から、ジジはじぶんじしんにたいする尊敬をすっかりなくしてしまいました。[...] これまでは、想像力のおもむくままに、天真らんまんに空想の世界をふわふわととびかかってきました。ところがいまでは、うそと知りつつうそを話しているのです！ (261)

ジジは自尊心を失い、彼のファンタジーも天かける翼を失う。引用文の最後に「うそと知りつつうそを話している」とあるが、原文は簡潔に「しかしいまや彼は嘘をついていた！」《Aber nun log er!》となっている。ベッポの考えによれば、嘘には意図的なものとそうでないものとのふたつがあったが、ジジは嘘とわかったうえで、物語をかたっている。それだけに、ジジの嘘は悪質であり、この意識が彼を苦しめる。

そして彼の作家としての人氣がどんなに高まろうと、それは灰色の男たちのおかげである。

Aber Gigi hatte keine Freude daran. Er wusste ja nun, wem er das alles verdankte. Er hatte nichts gewonnen. Er hatte alles verloren. [...] So war aus dem Träumer Gigi der Lügner Girolamo geworden. (176-117)

でもジジはひとつもうれしくありません。いまでは、だれのおかげでじぶんがこんな成功をおさめたのか、知っているからです。じぶんの力で手に入れたものは、なにひとつありません。じぶんのものは、なにもかも、なくしてしまったのです。[...] こうして、むかしの夢見るジジは、うそつきジロラモになりはてたのです。(261-262)

結

なぜ「夢みるひと、ジジ」《der Träumer Gigi》は、「嘘つきジロラモ」《der Lügner Girolamo》になってしまったのか。これまでの考察を「I」から「III」へとたどっていけば、ジジがベッポのもっとも怖れた、嘘つきに頹落した理由は明らかである。両者の比較から言えることは、ジジは豊かなファンタジーをほしいままにしてきたが、彼にはベッポに認められた《überlegen》と《nachdenken》、つまり反省することがなかったからである。

しかし問題はそんなに単純なことでかたづけられるのだろうか。ミヒャエル・エンデはある講演で述べている。

書くときにわたしをつき動かしている真の本源的原動力は、ファンタジーの自由な意図のない遊びを楽しむことなのです。

この文章こそは、筆者が論文の巻頭に掲げたものである。『モモ』に登場する夢想家ジジが世の中を大きな物語にみたと、その登場人物として真剣に演技し、遊んだことは、たしかである。しかし彼はその結果として、「ファンタジーの自由な意図のない遊びを楽しむこと」を失った。

それでは、ジロラモの挫折をこえて、ファンタジーの自由な意図のない遊びの楽しみは、どのようにして実現されるのか。それこそが『はてしない物語』のバスチアンに期待されるところである。バスチアンは『はてしない物語』の序章の最後で次のように言う。そしてそれに続けて、第1章がはじまるのである。

„Ich möchte wissen“, sagte er vor sich hin, „Was eigentlich in einem Buch los ist, solange es zu ist. Natürlich, sind nur Buchstaben drin, die auf Papier gedruckt sind, aber trotzdem — irgendwas muss doch los sein, denn

wenn ich es aufschlage, dann ist da auf einmal eine ganze Geschichte. Da sind Personen, die ich noch nicht kenne und es gibt alle möglichen Abenteuer und Taten und Kämpfe — und manchmal ereignen sich Meeresstürme, oder man kommt in fremde Länder und Städte. Das ist doch alles irgendwie drin im Buch. Man muss es lesen, damit man's erlebt, das ist klar. Aber drin, ist es schon vorher. Ich möchte wissen, wie?“ (16)

「本って、閉じているときに、中で何が起こっているのだろうな？」バスチアンはふとつぶやいた。「そりゃ、紙の上に文字が印刷してあるだけだけど、——きつと何かがそこで起こっているはずだ。だって開いたとたん、一つの話がすっかりそこにあるんだもの。ぼくのまだ知らない人びとがそこにいる。ありとあらゆる冒険や活躍や闘いがそこにある。——海の嵐にであったり、知らない町にきたり。みんな、どうやってかわからないけど、本のなかに入っているんだ。読まなくちゃ、そういうこといっしょにやれないわけだけど。それはわかっている。だけど、それがみんな最初から中に入っているんだ。どうやって入っているのかな？」(24)

こうしてバトンは嘘つきジロラモからバスチアンにわたされたのである。しかし彼の進む道もけっして平坦ではない。

【テキスト】

Michael Ende: *MOMO*. Thienemannsverlag in Stuttgart/Wien. 1973.

大島かおり訳 『モモ』(岩波少年文庫127) 2005年。

Michael Ende: *Die unendliche Geschichte*. Thienemannsverlag in Stuttgart/Wien. 1979.

上田真而子、佐藤真理子訳 『はてしない物語』(岩波書店) 1982年。

なお、引用した文章のページは、原文と訳文の最後に数字を括弧に入れて示した。

【注】

- 1) Michael Ende: *Michael Endes Zettelkasten*. Thienemannsverlag in Stuttgart/Wien. 1994. S.187. なお、田村都志夫は『エンデのメモ箱』(岩波書店1994年)で「わたしを書くことへ駆りたてる、まことの原動力は、ファンタジーの、自由で、意図がない遊びの楽しみなのです」(193頁)と訳している。
- 2) ミヒャエル・エンデ述、田村都志夫訳 『ものがたりの余白 —エンデが最後に話したこと』 岩波書店 2000年 23頁。
- 3) *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*. Akademie-Verlag in Berlin. 3 Bde. 1989. Bd.3. S.553.
- 4) *Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*. 8 Bde. Dudenverlag in Mannheim/ Leipzig/ Wien/ Zürich. 1993. Bd.3. S.1306.